



健康寿命延伸に向けた歯科医療の未来 口腔周囲組織の診断と経時的変化の把握

脇田 雅文 わきた歯科医院 / 神奈川県海老名市開業 / 日本大学松戸歯学部臨床教授

図1 当院3台目歯科用CT スープリーム3D



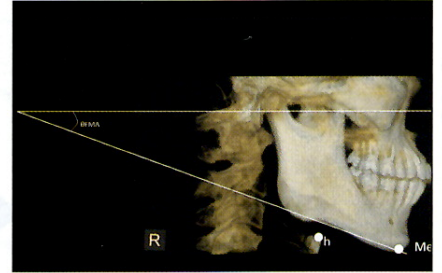
スローン→ファインキューブ→スープリーム3Dと、当院では3台目のCTとなった。

図2 位置づけで気を付けること



顔面の正中と床が垂直に交わるFH(フランクフルト)平面が、床と平行になるように最初の位置づけをしっかりと行う。最初の位置づけは記憶されるので、今後の計測の基準に大きくかわるので注意すること。
位置付けの亚克力板は医院にて製作

図3-1 FMAと舌骨の位置



FMA(Furankfort mandibular angle: 下顎下縁平面とFH(フランクフルト)平面のなす角度)および舌骨の位置。舌骨の三次元的位置(h) Mentonの位置(Me)を把握する。

図3-2 舌骨の位置



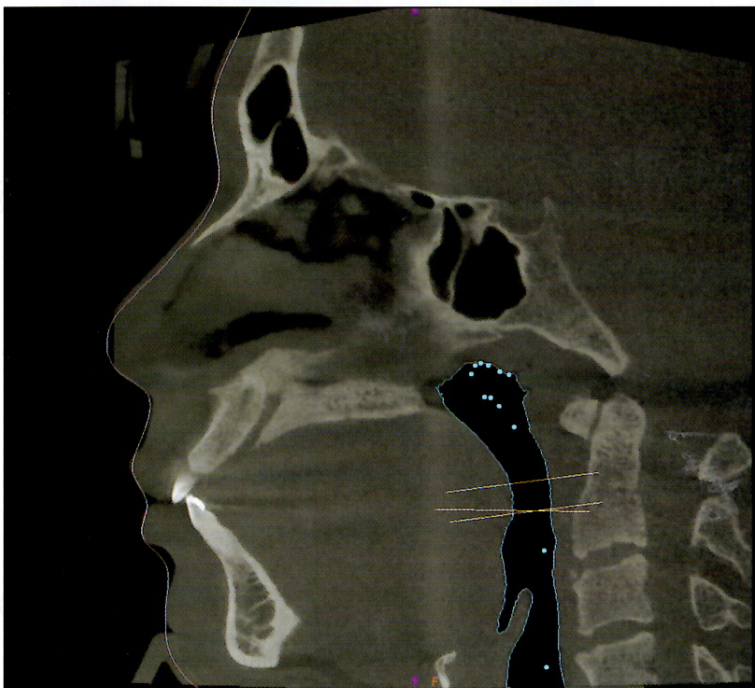
すこし下からあおって撮影すると舌骨の3次元的位置(h)が明確に判る。

図4 顎関節



CT画像は立体的に撮影されて、簡単に見る方向の変更と拡大縮小ができて、患者さんの視覚に訴える影響が大きい。

図5 軟組織が把握できるCT



矢状面による診断

- ① 下顎の位置
FH(フランクフルト)平面と下顎下縁平面のなす角度
参考: 図2、図3-1
- ② 舌骨
頭蓋の基準点から舌骨の基準点
(下顎骨は、顎舌骨筋を介して舌骨と連絡、舌骨は、中咽頭収縮筋の起始部)
- ③ 上咽頭の形や面積
- ④ 中咽頭の形(特に前後径や面積)
(口蓋骨の高さ、咬合平面相当部の高さ、舌背と舌根境界相当部の高さ、咽頭口蓋谷最深部の高さの把握が可能)
- ⑤ 喉頭蓋、喉頭蓋谷(特に喉頭蓋谷の最下点)

軟組織が把握できるCTで、補綴物装着前・装着後の変化、年齢による違い、長期的な口腔周囲筋のトレーニングを行うことによる変化、嚥下力、誤嚥のリスク等を回避するにはどうしたらよいか、観察して今後の診断に役立てることができる。歯科治療の有用性が明確に提示できる可能性が開かれている。